

第二章 阮籍「詠懷詩」にみる空間の特質 (一)

― 仙界と人間界を中心として

はじめに

第一章では、「詠懷詩」に展開されている世界の特質を時間側から考察した。

本章では、空間―人間界あるいは俗世―に目を向けていく。阮籍「詠懷詩」において、全篇をとおして言葉によって二つの空間が描き分けられているように見受けられる。二つの空間とは、他でもなく人間界（主人公が身を置く俗世）と仙界（俗世から隔たった空間）である。

「詠懷詩」の仙界をめぐって、吉川幸次郎氏は前掲『阮籍の「詠懷詩」について』において、「神仙の生活へのあこがれを示す詩は甚だ多く、全「詠懷詩」を通じて最もしばしば現れる主題の一つであると指摘した上で、仙界を希求する理由として「要するに阮籍は、過剰のない故に永遠な生活を希求し、その理想形として希求の中心にあるものは神仙の生活である」と述べる。

しかし、阮籍詩に先行する漢代樂府や建安詩に詠われた仙界の様相に目を向けていくと、「詠懷詩」において憧れとするところの環境を必ずしも兼ね備えているわけではないことに気付く。「詠懷詩」における仙界は、人間界と密接に関わり、人間界の様相を浮かび上がらせる影絵のような役割が付されているように見受けられる。結果、理想とする空間として整ったと考える。

本章では、「詠懷詩」に描き出された仙界の特質を通して、主人公が生きる人間界の様相を見ていくこととする。

一、不老不死の空間としての仙界

仙界は、漢代樂府をはじめ多くの作品に詠われてきた。

例えば、漢代楽府「長歌行」では、「主人此の薬を服し、身体日に康彊たり。髪白きも復た黒きに更る、延年寿命長し」と、「主人」が仙薬を手に入れ、若返っていく様子が詠われる。

続く建安においても、曹植「飛龍篇」では、「我に仙薬を授く、神皇の造る所なり。我をして服食せしめ、精を還し脳を補う。寿は金石と同じくし、永世老い難し」と、「永世」の条件として仙化が意識される。

阮籍「詠懷詩」に見える仙界も不老不死と結びつく。其二十四を挙げよう。

殷憂令志結	殷憂	志	をして結ばれしむ
怵惕常若驚	怵惕	常に驚くが若し	
逍遙未終晏	逍遙	未だ晏を終えずして	
朱華忽西傾	朱華	忽ち西に傾く	
蟋蟀在戶牖	蟋蟀	戸牖に在り	
蟋蟀號中庭	蟋蟀	中庭に号く	
心腸未相好	心腸	未だ相好せず	
誰云亮我情	誰か云ふ	我が情を亮かにすと	
願爲雲間鳥	願わくは	雲間の鳥と為り	
千里一哀鳴	千里	一たび哀鳴せん	
三芝延瀛洲	三芝	瀛洲に延べ	
遠遊可長生	遠遊して	長生すべし	

冒頭八句は、人間界の様相を述べる。「殷憂」「怵惕」はいずれも強い負の感情。こうした感情に囚われ小心翼翼として生きる様子が詠われる。理想とする「逍遙」は打ち切られ、朱華の様子（視角）、蟋蟀と蟋蟀の鳴き声（聴覚）によって、時間の移り変わりが知らされる。人間界における憂慮と疎外感を吐露する。第九句ではこうした人間界からの逃避が志向される。仙界に思いを巡らし、「長生」が願われる。

人々は不老不死を願ってきた。もつとも早くに成立した作品集『詩経』小雅「信南山」において既に、「我が戸賓に昇れば、寿考万年ならん（昇我戸賓、壽考萬年）」と万年生きることへの願いが詠出されている。始皇帝が盧生を遣わし、不老不死の仙薬を探し求めさせた有名な逸話も歴史書に見える^三。古来より続く生きることへの渴望が、漢代楽府、建安詩、「詠懷詩」に見られる仙界への希求となって詠出されている。

二、清逸な空間としての仙界

「詠懐詩」において仙界は、清逸な空間としても展開されている。もちろん、例えば極限にまで広がるスケールの大きさ、超人的な身体能力が得られる神秘さなど、仙界はさまざまな側面を伴って詠われてきた^四。しかし、「詠懐詩」に描かれた仙界は、俗世（人間界）の劣悪が取り除かれた清らかさが強く意識される点において、独特な様相を見せる。「詠懐詩」其五十七を挙げよう。

驚風振四野	驚風	四野に振う
迴雲蔭堂隅	迴雲	堂隅を蔭う
牀帷爲誰設	牀帷	誰が為に設け
几杖爲誰扶	几杖	誰が為に扶けん
雖非明君子	明君子	に非ずと雖も
豈聞桑與榆	豈に桑と榆	「太陽の沈むところ」より聞からんや
世有此聾聵	世に此の聾聵有り	
芒芒將焉如	芒芒として將に焉くにか如かん	
翩翩從風飛	翩翩として風に從いて飛び	
悠悠去故居	悠悠として故居を去る	
離塵玉山下	離れて玉山の下を塵し	
遺棄毀與譽	毀と譽とを遺棄せん	

「驚風」「迴雲」に覆われた穏やかならざる情景を受け、世事への批判が展開される。「牀帷」「几杖」は主君から賜るもの。しかし与える側の者、与えられる側の者ともども「明君子」ではなくとも、これほどまでに明察できないことなどあるうか、と詠う。世に対する失望、疎外感が吐露される。「芒芒として將に焉くにか如かん」によって導かれた逃避先として仙なる「玉山」が選ばれる。現世的な価値である「毀と譽」が取り除かれた空間として捉えられる。

人間界に覚える違和感を契機として仙界へ出かけていくことを詠った作品として、まず「離騒」が挙げられる。「離騒」では、「固より時俗の工巧にして、規矩に価きて改錯す。繩墨に背きて曲に追ひ、周容を競いて以て度と為す（固時俗之工巧兮、価

規矩而改錯。背繩墨以追曲兮、競周容以爲度」と、俗世の「工巧」さを挙げる。ただここでは、人間界を離れることで現状の改善を期待するが、彼の苦悩は天上界においても癒えることはなかった。「離騷」における天上界は、不平を補完できる空間として存在していない。

同じ屈原の作品とされる「遠遊」では、「時俗の迫阨はくやく〔狭くて険しい〕を悲しみ、軽挙して遠遊せんことを願う（悲時俗之迫阨兮、願輕舉而遠遊）」と、俗世が「迫阨」であるため、天界へ出掛けていくことを詠う。主人公が翔け、「遠遊」することで人間界における苦悩はいったん解消される。しかし、「旧故を思いて以て想像し、長太息して涕なみだを掩う（思舊故以想像、長太息而掩涕）」と、天界に遊ぶことで望郷という新たな愁傷が生まれる。ここでは天界は、時と場合によって主人公に苦悩を齎しうる空間となっている。

「離騷」「遠遊」といった『楚辞』文学以降、例えば漢代樂府や建安詩における仙界は、第一節「不老不死の空間としての仙界」において見てきたように、もっぱら無限の生を内包する空間として詠われる。不老不死を願うゆえ仙界に憧れを抱き、仙界に遊べば延命できるといった内容が多数を占める^五。

これに対し、阮籍「詠懷詩」における仙界は、不老不死を實現できるだけでなく、先に挙げた其五十七でも確認したように、現世的な苦悩が取り除かれた完璧な空間として描かれる。仙界あるいは仙なるものを詠み込んだ作品は「詠懷詩」に三十余りを数えるが、このうちのおおよそ八篇に、人事、世事からの逃避先として仙界に目が向けられる。

負の要素によって満たされた人間界とは相反する理想の空間として強く意識することによって、「詠懷詩」における仙界は、漢代樂府、建安詩はもとより、『楚辞』に見られるものとも異なる性格を有する。このことは次の節において更に詳しく見ていく。

三、仙界と人間界の関係

阮籍が仙界を詠うとき、人間界の様相を強く意識する。作品構成によってこのことが示される。

例えば、曹操「陌上桑^六」では、仙境での遊仙体験が中心となり、人間界を窺い知

る描写はない。曹丕「折楊柳行七」では、仙境の風景や主人公が仙境に遊ぶ様子に文字を費やし、人間界に触れることはない。

これに対し阮籍詩では、仙界と人間界が強く結びついており、仙界に言及した作品の全てに人間界が詠み込まれている。作品中に見られる仙界と人間界の関係からおおよそ次の三つのタイプにまとめることができる。

一つは、仙界と人間界が対照的に取り上げられている作品である。其四を例としよう。

天馬出西北	天馬 西北より出づ
由來從東道	由りて來たるに東道に従う
春秋非有託	春秋は託 有るに非ず
富貴焉常保	富貴 焉んぞ常を保たん
清露被皋蘭	清露 皋蘭を被い
凝霜霑野草	凝霜 野草を霑す
朝爲媚少年	朝は媚い少年たりしも
夕暮成醜老	夕暮には醜老と成る
自非王子晉	王子晉に非ざるよりは
誰能常美好	誰か能く常に美好ならん

人間界では、草花は枯れ、人間はいずれ衰えゆく。これに対し、仙人の王子晋はいつまでも「美好」である。仙なる王子晋の存在によって人間界の儂さが印象付けられる。他にもいくつか挙げよう。

焉敢希千術	焉んぞ敢て千術を希わん
三春表微光	三春 微光を表わす
自非凌風樹	凌風樹に非ざるよりは
憔悴烏有常	憔悴して烏くんぞ常あらん

(其四十四)

墓前熒熒者	墓前の熒熒たる者
木槿耀朱華	木槿「むくげ」 朱華を耀かす
榮好未終朝	榮好 未だ朝を終えずして

連颯隕其葩
豈若西山草
琅玕與丹禾

連颯れんひょう其その葩はなを隕おとす
豈あに若せいざん西山くさの草の
琅玕ろうかんと丹禾たんかに若しかんや

(其八十二)

いずれも、仙なる生と人間界に生きる生命を対比させている。永劫を生きる仙によつて、「三春」「百年」「未終朝」というように人間界のものの儚さが際立たれる。「詠懐詩」において、仙界は憧憬の対象であり、それゆえ懐疑あるいは落胆を齎す存在ともなっている。こうした感情を介して両者が結びつき、一篇を構成する。次に、感情を介し仙界と人間界が結びつく作品を見てみよう。

世務何繽紛	世務 <small>せむ</small> 何 <small>なん</small> ぞ <small>ひんぶん</small> 繽紛 <small>た</small> る
人道苦不遑	人道 <small>じんどう</small> 苦 <small>はなは</small> 不 <small>い</small> 遑 <small>しま</small>
壯年以時逝	壯年 <small>そうねん</small> 時 <small>とき</small> を以 <small>もつ</small> て逝 <small>ゆ</small> き
朝露待太陽	朝露 <small>ちやうろ</small> 太陽 <small>たいよう</small> を待 <small>ま</small> つ
願攬羲和轡	願 <small>ねが</small> わくは羲和 <small>ぎか</small> の轡 <small>くつわ</small> を攬 <small>と</small> り
白日不移光	白日 <small>はくじつ</small> をして光 <small>ひかり</small> を移 <small>うつ</small> さしめざらんことを
天階路殊絕	天階 <small>てんかい</small> 路 <small>みち</small> 殊 <small>こと</small> に絶 <small>た</small> え
雲漢邈無梁	雲漢 <small>うんかん</small> 邈 <small>はる</small> かにして梁 <small>はし</small> 無 <small>な</small> し
濯髮暘谷濱	濯 <small>かみ</small> 髮 <small>ようこく</small> 暘谷 <small>ほとり</small> の浜 <small>あ</small> ら
遠遊崑岳傍	遠 <small>とお</small> く崑岳 <small>こんがく</small> の傍 <small>そば</small> に遊 <small>あそ</small> ぶ
登彼列仙岨	登 <small>か</small> れつせん <small>のほ</small> の彼 <small>の</small> 列仙 <small>れつせん</small> の岨 <small>そ</small> に登 <small>のぼ</small> り
採此秋蘭芳	採 <small>と</small> 此 <small>しゅうらん</small> の秋蘭 <small>ほう</small> の芳 <small>と</small> を採 <small>と</small> る
時路烏足爭	時路 <small>じろ</small> 烏 <small>いず</small> く <small>んぞ</small> 争 <small>あ</small> ら <small>そ</small> う <small>に</small> 足 <small>た</small> らんや
太極可翱翔	太極 <small>たいきよく</small> 可 <small>こうしやう</small> 翱翔 <small>すべし</small>

(其三十五)

「世務」「人道」に迫われ、「壯年」がたちまち遠ざかり、生命は「朝露」のように儚い。冒頭八句において、人間界に生きる苦しみを吐露する。第九句からは仙境に思いを馳せ、「髮を濯」「い、山に「登」り、花を「採」り、「太極」を「翱翔」するといった一連の行動を想像する。「列仙の岨」「崑岳の傍」と自由に移動し、のびのびと心の赴くままに生きる様子で詠われる。後半における仙界への逃避願望は、前半におい

て振り返られた人間界の劣悪を端緒とする^八。

一方は悪・負に満たされた空間であり、一方はそれらが取り除かれた善・正の空間となつている。人の生は儂い上、向き合う世事も煩雑である。人間界を否定すべき対象として強く意識するところに、「詠懐詩」における仙界（「不老不死としての空間」「清逸な空間」）が形成される。

仙界と人間界はそれまでの作品の中において、正・負というように対照的に捉えられてきたわけではない。例を挙げるならば、例えば、漢代楽府「隴西行」では、天上界の長閑な情景とともに、「顧みて世間の人を視るに、樂たること甚だ独り殊なり。好婦出でて客を迎え、顔色 正に愉を敷く^九」と、仙界とともに描かれた人間界は同じように楽しい様子である。

曹操「氣出倡」においては、仙界と人間界を殊更に区別していない。

酒與歌戲

酒と歌戲

今日相樂誠爲樂

今日相樂しみ誠に樂しみを為さん

玉女起起儂移數時

玉女起ち起ちて儂い數時を移す

（中略）西山草

來者爲誰

來たる者誰為らん

赤松王喬乃德旋之門

赤松と王喬乃ち德旋の門〔南門星〕

樂共飲食到黃昏

樂しみ共に飲食して黃昏に到る

仙界の宴を描くが、「酒」「歌戲」「玉女」といようにその様子は俗界で行われる宴会そのものである^十。

これに対し、「詠懐詩」は全篇にわたって、両空間ははっきりと詠み分けられている。人間界に生まれたものは人間界に留まったままであり、仙界に属するものは人間界のものと交わることはない^{十一}。両方の空間を隔てる境界線を明確に意識させる。三十首あまりに仙への言及が見られ、また仙界への強い憧憬を吐露しているのにも関わらず、主人公が人間界から離れ、遊仙の主体となることは「詠懐詩」中に見出せない。劣悪な環境である俗世と理想郷としての仙界、対照的な両空間の位置づけは「詠懐詩」中で変化することはない。このため、個別な詩において、例えば具体的な俗世への説明を介さなくとも、仙界を象る言葉の中に人間界に対する嫌悪を含ませるものがある。人間界と仙界の三つ目の関係である。其二十三を見てみよう。

東南有射山	東南に射山あり
汾水出其陽	汾水其の陽より出づ
六龍服氣輿	六龍 氣輿に服し
雲蓋切天網	雲蓋 天網に切る
仙者四五人	仙者 四五人あり
逍遙晏蘭房	逍遙して蘭房に晏む
寢息一純和	寢息 一に純和にして
呼喻成露霜	呼喻 露霜と成る
沐浴丹淵中	沐浴す丹淵の中
炤耀日月光	炤耀す日月の光
豈安通靈臺	豈 通靈台に安んぜんや
游瀼去高翔	游瀼し 去りて高翔す

六頭の竜が引く車の屋根は雲蓋にも届くほどであり、四、五の仙人は逍遙して、芳しい部屋で休んでいる。太陽と月の出ずるところの丹淵で水浴びをし、その光を受け、体を清浄にする。仙人は俗界の「通靈台」に落ち着くはずはなく、彼方へ高々と飛んで行くのみ、と結ぶ。

通靈台は、人間が仙との交流を望んで建てた台である。人間界に関する言及はこれ以外に見えない。しかし、「詠懐詩」の他の作品によって蓄積された人間界像と合わせ考えてみると、「豈 通靈台に安んぜんや」という地上世界への拒否を表した一句は理解できよう。人間界は潔浄な仙境とは隔たった醜悪な空間であるためだと。其十九においても、仙人と人間のこうした関係が見てとられる。

西方有佳人	西方に佳人あり
皎若白日光	皎として白日の光の若し
被服織羅衣	織羅の衣を被服し
左右佩雙璜	左右 双璜を佩ぶ
修容耀姿美	容を修め姿美を耀かし
順風振微芳	風に順い微芳を振う
登高眺所思	高きに登り思ふ所を眺め
舉袂當朝陽	袂を挙げ朝陽に當る
寄顏雲霄閑	顔を雲霄の閑に寄せ

揮袖凌虚翔	袖を揮い虚を凌ぎて翔ける
飄飄恍惚中	飄飄恍惚の中
流眇顧我傍	流眇して我が傍を顧る
悦懌未交接	悦懌するも未だ交接せず
晤言用感傷	晤言して用て感傷す

「佳人」の白さ、身に纏う服の美しさ、ほんのり漂わせる香り、麗しい仙女の姿かたちを描く。そして、高いところに登り、朝日を浴び、袖を翻し大空へと飛翔する優雅な行動を詠む。理想の女性である。ひらひらと翔けつつ、流し目でこちらをふり返るが、主人公は相手にされることなく、落胆する。

「詠懐詩」において、仙界は必ず人間界とともに詠まれる。両方の空間はそれぞれ善・悪、正・負のイメージによって描き分けられ、全篇にわたって両空間は交差することはないのである。

おわりに

「詠懐詩」に見られる仙界は、第一節「不老不死の空間としての仙界」、第二節「清らかな空間としての仙界」において確認したように両方の性格を有する。仙界と人間界は善・悪、あるいは正・負に突出したイメージで形成され、緊密に関わっている。人間界を強く意識することで、仙界は理想の空間として整えられ、従前の作品とは異なる様相を呈す。また、完璧な空間としての仙界によって、人間界の劣悪が一層明確に提示される。作中の主人公はあくまで人間界に留まり、仙界に身を置くことない。「詠懐詩」に詠出されたのは、理想を掲げながらも、それとは相反する希望の見出せない空間―人間界―に生きる主人公の姿である。

次の章において、作中に詠まれた逃避という行為から浮かび上がる主人公が身を置く場―人間界あるいは俗世―の特質について更に詳しく見ていくこととする。

注

一 遠欽立『全漢詩』卷九「仙人騎白鹿、髮短耳何長。導我上太華、攬芝獲赤幢。來到主人門、奉藥一玉箱。主人服此藥、身體日康彊。髮白復更黑、延年壽命長。岩岩山上亭、皎皎雲間星。遠望使心思、遊子戀所生。驅車出北門、遙觀洛陽城。凱虫吹長棘、夭夭枝葉傾。黃鳥飛相追、咬咬弄音聲。佇立望西河、泣下沾羅纓。」

二 遠欽立『全魏詩』卷六「晨游泰山、雲霧窈窕。忽逢二童、顏色鮮好。乘彼白鹿、手翳芝草。我知真人、長跪問道。西登玉臺、金樓復道。授我仙藥、神皇所造。教我服食、還精補腦。壽同金石、永世難老。」

三 『史記』秦始皇本紀「三十二年、始皇之碣石、使燕人盧生求羨門、高誓。」羨門、高誓は古の仙人の名である。

四 例えば、曹植「仙人篇」の「徘徊九天上」という一句に天上界の広がりを見ることができ、また、仙槩によつて、空へ羽ばたく様子を描く曹丕の「折楊柳行」や、曹植の「盤石篇」において「一舉必千里」というように、人間を遥かに凌駕する仙人の移動能力が詠まれる。

五 漢魏の詩の中に、仙なるものと不老不死を関連付け詠んでいるものは管見の限り凡そ十六首ある（『先秦漢魏晉南北朝詩』に拠る）。一方、仙界に思いを馳せる理由として俗世の不足に目を向けた作品は曹丕「雜詩二首」其一首のみである。（これとは別に、曹植「五遊詠」において、天上界へ行く理由として「九州不足歩」と人間界の物理的な狭さを挙げる。ここでは、世俗そのものというより人間界の空間的な限界への倦厭ととり、後者に含めないこととする。）

六 『全魏詩』卷一「駕虹霓。乘赤雲。登彼九疑歷玉門。濟天漢。至崑崙。見西王母。謁東君。交赤松。及羨門。受要秘道愛精神。食芝英。飲醴泉。拄杖桂枝佩秋蘭。絕人事。遊渾元。若疾風遊欵飄翻。景未移。行數千。壽如南山不忘愆。」

七 『全魏詩』卷四「西山一何高。高高殊無極。上有兩仙僮。不飲亦不食。與我一丸藥。光耀有五色。服藥四五日。身體生羽翼。輕舉乘浮雲。倏忽行萬億。流覽觀四海。茫茫非所識。彭祖稱七百。悠悠安可原。老聃適西戎。于今竟不還。王喬假虛辭。赤松垂空言。達人識真偽。愚夫好妄傳。追念往古事。憤憤千萬端。百家多迂怪。聖道我所觀。」

八 吉川氏は前掲『阮籍の「詠懷詩」について』において、先行する諸家の神仙世界への憧れと「詠懷詩」に見える仙界への憧れ違いの一つとして以下のように述べる。「それらはなお、無邪気なよりよき世界へのあこがれであり、阮籍のごとく、人間の生活の様相に熟視をかさねてのちに求められているのでは、必ずしもない。阮籍のごとき形での神仙の世界へのあこがれは、阮籍にはじまるとしななければならない」と。また、福永光司氏は「阮籍における懼れと慰め―阮籍の生活と思想―」（『東方学報』、一九五八年）において、阮籍の神仙世界を詠んだ詩について「彼の神仙への憧憬は、現実の醜悪さ、人生のはかなさと対比して歌われているのである」と述べている。また、「阮籍にとつて、神仙の

世界は人間の悲しみと懼れを超克した真実の世界、その真実を象徴する世界であった」と、人間の劣悪さを超克した空間、ちょうど神仙の世界がそうした空間の象徴であるため、阮籍は懂れを抱くのだと分析をしている。ここでは、両者の説を踏まえつつ、仙界によって浮かび上がってくる主人公が身を置く人間界の様相に関心を置く。

九 遠欽立『全漢詩』卷九「邪徑過空虛、好人常獨居。卒得神仙道、上與天相扶。過謁王父母、乃在太山隅。離天四五里、道逢赤松俱。攬轡為我御、將吾上天遊。天上何所有、歷歷種白榆。桂樹夾道生、青龍對伏跂。鳳凰鳴啾啾、一母將九雛。顧視世間人、為樂甚獨殊。好婦出迎客、顏色正敷愉。伸腰再拜跪、問客平安不。請客北堂上、坐客氈氍毹。清白各異樽、酒上正華疏。酌酒持與客、客言主人持。卻略再拜跪、然後持一杯。談笑未及竟、左顧勅中廚。促令辦粗飯、慎莫使稽留。廢禮送客出、盈盈府中趨。送客亦不遠、足不過門樞。取婦得如此、齊姜亦不如。健婦持門戶、一勝一丈夫。」

十 王宜瑗「魏晉遊仙詩与詩人的精神世界」（『中国学志』、一九九五年）において、魏晉の遊仙詩について、遊仙詩の中に描かれた仙境はその多くは人間化、世俗化される傾向が見られる、と指摘している。その現象の一つとして、仙界に期待することの世俗化をあげ、仙界においても人間界と同じように酒を飲み談笑していることをしていることを挙げている。なお、阮籍は酒にまつわるエピソードを多く残しており、大酒飲みとして知られるが、「詠懷詩」において、酒を詠み込んだ篇は見当たらない。

十一 「詠懷詩」には物語を題材として作られた詩がある。其二「二妃游江濱、逍遙順風翔。交甫懷佩環、婉孌有芬芳。猗靡情歡愛、千載不相忘。傾城迷下蔡、容好結中腸。感激生憂思、萱草樹蘭房。膏沐為誰施、其雨怨朝陽。如何金石交、一旦更離傷」、及び其六十五「王子十五年、遊衍伊洛濱。朱顏茂春華、辯慧懷清真。焉見浮丘公、舉手謝時人。輕蕩易恍惚、飄飄棄其身。飛飛鳴且翔、揮翼且酸辛」である。これらの詩は『列仙伝』に見える王子晋登仙の逸話または、二妃と鄭交甫が出会うエピソードに基づいて作られている。ここに挙げた二篇に見える人間界は、それぞれが基づく物語世界における人間界であり、「詠懷詩」における主人公が身を置く人間界とは区別する必要がある。本章でいう人間界とは「詠懷詩」における主人公と時空を共有する世界と限定する。